
魔法少女ちゅーりっぷん 悲しみよさようなら

源雪風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女ちゅーりっぷん 悲しみよさようなら

【Nコード】

N1021K

【作者名】

源雪風

【あらすじ】

魔法少女ちゅーりっぷんはついにラスボスに殴りこみ！

いかついボスかと思いきや、意外な奴が魔法少女を待っていた！

魔法少女ちゅーりっぷん 悲しみよさようなら

魔法少女ちゅーりっぷんの三人は、悲しい戦いを終わらせるべく、敵のボスに会うことにした。

「お姉ちゃんたち、何しに来たの？」

魔法少女ちゅーりっぷんが、振り向くと、10歳くらいの、あどけない少年がいた。

しかし、その目に輝きは、ない。

「分かった。お姉ちゃんたちが僕の邪魔をする、悪いやつらなんだ・・・。」

「まさか、この子がラスボス？」と、莓。

「嘘でしょ。」と、楓。

「巨大化するんじゃないですか。」と、れもん。

「なんで僕の邪魔をするの。僕は、みんなが幸せに暮らせる世界を作りたいのに。」

「どういうこと？」と、莓は叫ぶ。

「人は、心があるから苦しんだり、悲しんだり、余計な気持ちを抱くんだ。正義と勝利は、たかが他人同士なのに仲良くして、一人では何もできない人間に変わり果てた。そして、哀れに死んでいった。かなただって、敵の君たちへの馬鹿らしい好意のために、僕を裏切った。愛なんて、心なんてなければ、あいつらが死ぬことなんてなかったんだ。だから、僕が苦しむ人々を楽にしてあげるよ。みんなの心を消して、僕が導いてあげる。そうすれば、もう、馬鹿なことは起こらないでしょ。僕がみんなを平等に愛して、平等に幸せにしてあげる。」

魔法少女たちは、ただ少年を見ているしかなかった。

「今頃、世界中のみんなが、僕に心を消されて、幸せになろうとし

ている。それなのに君たちはどうしても心が消えない。だから、体ごと消してあげる。・・・邪魔な小童どもは消えろ！」

少年は、どす黒い闇に包まれ、20歳くらいの青年になった。

ちゅーりっぷんは、身構えた。

その瞬間、ボスは神速でちゅーりっぷんの背後にまわり、黒い刃で攻撃してきた。

ちゅーりっぷんは、懸命に応戦する。

三日くらい戦った後、ちゅーりっぷん、ラスボスは共に倒れた。

倒れた四人を人食いの木が、飲み込んでしまう。

木には、黒い花が咲いた。

ちゅーりっぷんは、意識尾を失いそうになりながら、思った。

確かに、生きるのは苦しいかもしれない。

でも、私たちには夢や希望がある。

つらいことがあっても、次にはいいことが起こる。

心を失ってしまったら、幸せになれるはずなんてない。

だから、私たちは苦しくても生きていきたい。

その気持ちが通じたのか、ちゅーりっぷんの魔法と希望の力が、木に伝わった。

みるみるうちに、黒い花は、真っ白なかわいらしい花に変化した。

木の周りから、花畑が広がり、コンクリートに覆われた地面を、砂漠を、枯れた森を、人々の心を花でいっぱいにした。

僕は花畑で一人、座っていた。

ふと、どくだみの花が目についた。

この花は、人間にひどい名前をつけられているというのに、こんなに懸命に生きている。

人間にいくらむしられても、また生えてくる。

何でそんなに苦しんでまで生きようとするのだろう。

僕は自分の手首にある、無数の切り傷を見た。

その時、どくだみの声が聞こえてきた。

「たった一度の花の命だもの。精いっぱい生きてやるわ。」

「どうしてそこまでして生きようとするの。」

「生きたいから生きる。それだけよ。それ以上の理由なんてないわ。」

「辛くなったり、いやになったりしないの?」

「辛いことがあっても、いつか何とかなるわ。雨が降ってもいつかやむし、太陽は私たちを優しく照らしてくれるわ。あなただって、きっといいことがあるわよ。」

僕が話していたのは、どくだみではなかった。

気が付くと、僕の周りには、魔法少女ちゅーりっぷんがいた。

「そうか。僕が導かなくても、みんな幸せになれるんだ。」

そう気付いた時、僕の脳裏には正義と勝利、そしてかなたの笑顔が浮かんできた。

「僕は、僕はなんてことをしてしまったんだろう……。」

「ボスー!」

花畑の向こうから声がした。

僕は耳を疑った。

「正義、勝利、かなた!」

三人は駆け寄ってきた。

「ボス、俺たちが弱かったせいで……ごめんなさい。」

正義と勝利がそろって頭を下げた。

「裏切って申し訳ありませんでした。」

かなたも頭を下げた。

謝るのは、僕のほうなのに。

「僕が自分勝手なことを考えて、罪のない君たちを巻き込んでしまった。謝るのはこっちのほうだよ。」

「さあ、せっかく再会したんだし、パーティでもして盛り上がりましょうよ。」と、苺は言った。

もつともな理由をつけてお菓子が食べたかっただけだということは、

ここだけの秘密だ。

みんなと馬鹿なことをしたり、下らない話をしたりして、笑いあった。

心があつてよかったと本気で思った。

なんでこんなに楽しい仲間がいるのに、今までパーティしなかったんだろう。

僕は今、とても幸せだ。

みんな、ありがとう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1021k/>

魔法少女ちゅーりっぷん 悲しみよさようなら

2010年12月25日18時28分発行